くまもとの遊びと文化

メンコ、ビー玉、おはじき、おじゃめ……。思いつくままに、昔ながらの遊びを並べてみれば、何かしら遠い日の郷愁が漂ってくるようです。お正月の家族の顔や、夏休みのセミの声とともに多くのシーンがよみがえります。近所のおにいちゃん、おねえちゃん達に交じって、初めてゲームに参加した時の喜び、ルール違反をとがめられて泣いたこと。どうしても草笛がうまく作れず、とうとう鳴らなかった悔しさ。そんな毎日を重ねながら物を作ることを覚え、グループ行動でのルールを覚え、さらに楽しむために知恵を絞り、心も体も少しずつ大人になってきたのです。

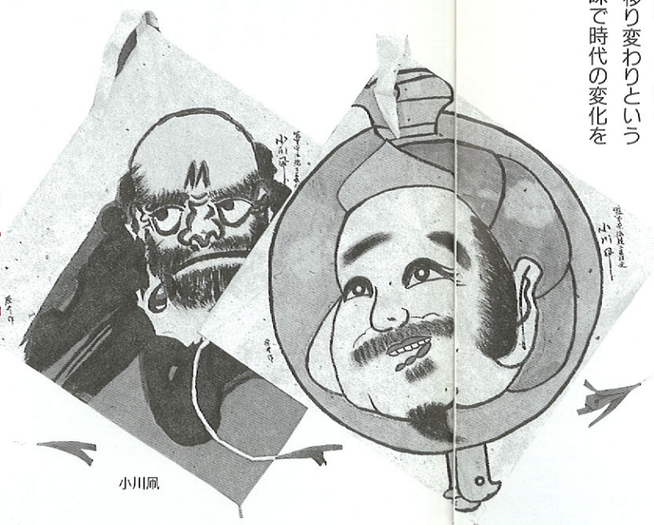
そこで、「遊び」を通して子供たちは何を学んできたのか?を見つめ直してみたいと思います。時代の流れの中で忘れられつつある昔ながらの遊びや、県下に伝わる独自の玩具・遊びをふり返れば、そこに熊本独自の文化の芽となったものが発見できるかもしれません。

作る

「同じ大きさの石ころを集めておはじきをしたり……。外で遊んでましたね。花摘みだとかおままごと。物のない時代でもありましたから、遊ぶ道具はそこにある材料を使って自分で作り出してました。今は何でもすぐに買ってしまうでしょう。私はある程度までは手作りします」と話してくれたのは、熊本市在住の野村富美子さん(菊池郡大津町出身・47歳)。また、おもちゃ問屋経営の小川更二さん(熊本市・59歳)は、専門家の立場からこう語ります。「例えば昔はお母さんが娘に千代紙人形とか作ったかもしれない。しかし、高度経済成長の中でリカちゃん人形やダッコちゃんが出てくる。豊かさの中でファッション性が遊びに不可欠な要素として現れてくるんです。おもちゃや遊びの移り変わりというのは、そういう意味で時代の変化を反映していますからね」。

多くの物が溢れ、作るより簡単に、時には安価に手に入る現代。そんな時代だからこそかえって、苦労して作り上げた自分だけのオリジナルに愛着がわくのではないでしょうか。そして作ることは、物を大切にする心に通じていくようです。

PLAY



小川凧

●小川凧(下益城郡小川町)

下益城郡小川町は、大正の初めまで手漉(すき)きの和紙があったことと、竹骨に使うマダケが豊富にあったことから凧揚げが盛んで、この地方独特の揚げ凧が伝わっている。

二本のマダケの竹骨を交差して組み立てたところに、だるまやえびすなどの古典漫画風な絵柄を描いた四十センチメートル四方の和紙(障子紙)をのりで貼りつけ、竹骨の交差点(中心)に糸を一本通しただけのこの凧。硬さや重さが十分でないとバランスを崩し、思うように揚がらない。

小川町では、この小川凧の伝統を守り伝えていこうと、毎年十二月には公民館で小中学生に保護者を交えて凧作りを行っている。ただここでは、基本的な骨組みは従来通りだが、張りつける和紙にはアニメの主人公を描こうが、願いごとを書こうが自由。伝統の中に〝今〟をミックスした凧は、カラフルでユニークな仕上がりを見せている。新しい感覚を取り入れながら伝承していく一つのカタチがそこにあるようだ。

■お問い合わせ
下益城郡小川町中央公民館
住所=下益城郡小川町大字江頭三三
☎0964・43・0004

●きじ馬(人吉市)

約八百年の伝統を持つ人吉のきじ馬と花手箱。荒削りの桐(ざつ)木に模様を入れ、松の輪切りを車とした、無雑作な手作りの玩具だった。

きじ馬

■お問い合わせ
源島 斉
住所=球磨郡多良木町久米二二五
☎0966・42・2258

住岡忠嘉
住所=人吉市鍛冶屋町二五二
☎0966・22・4664

宮原 健雄
住所=人吉市中林町五二四
☎0966・23・3070

CULTURE